

令和7年度 中学生の税についての作文

中野区長賞

【「あたりまえ」って、誰かのおかげ】

中野区立中野東中学校3年 丸石 菜結

「あたりまえ」って、きつととても贅沢なことなんだ。朝起きて、温かいご飯を食べて、学校に行く。そんな毎日が、ある日突然なくなった人たちがいた。令和6年、元日に起きた能登半島地震。そのニュースを見たとき、私は胸がぎゅっと苦しくなった。

寒い体育館の床に毛布1枚で寝るお年寄りの方。段ボールで仕切られた空間で過ごす子どもたち。お正月なのに、笑顔はどこにもなかった。「私たちはこんな風にテレビを見ていいのかな…。」と、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

あとで知ったことがある。被災地に届けられる食料や毛布、仮設住宅の建設や避難所の運営、そうした支援の多くは、私たちの税金によって行われているということだった。それを知ったとき、税金のイメージが少し変わった。今までは「とられるお金」「大人になったら払わなきゃいけないもの」としか思っていなかったけれど、それだけではなかった。税金は、困っている人を助けるために使われている。見えないところで、たくさんの人の命や暮らしを支えている。

私の学校にも、税金が使われていると先生が教えてくれた。教室のエアコン、図書室の本、タブレット学習に使う機器。私たちがあたりまえに使っているものも、実は多くの人のお金によって支えられていたのだ。

これから私は大人になって、自分でお金を稼ぐようになる。そのときにはきっと、税金を納めることになるだろう。でも私は、ただ「もったいない」と思うのではなく、「誰かの力になれるお金なんだ。」と考えたい。今の私にできることは少ないかもしれないけれど、まずは身のまわりの「ありがとう」を見つけたり、税金が使われている場所に目を向けたりすることから始めていきたい。そしてこれからは、地域の活動などにも少しずつ参加して、「誰かのために役立つ」ことを実感できるようになりたい。

あたりまえの毎日は、たくさんの支えがあって成り立っている。そのことを忘れずに、これからの社会に、少しでも自分の力を役立てていきたいと思う。